

氏名	TIN HTUT AUNG
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 6008 号
学位授与の日付	平成 31 年 3 月 25 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	Lithic technology and typology from hunter-gatherer sites in Myanmar with special reference to central belt and western fringe of Shan plateau (ミャンマーにおける狩猟採集民遺跡出土石器の製作技術と型式—中央溪谷帯およびシャン高原西辺部を中心に—)
学位論文審査委員	特任教授 新納 泉 教授 松本 直子 教授 清家 章 教授 渡邊 佳成 准教授 光本 順

学位論文内容の要旨

題目(訳)「ミャンマーにおける狩猟採集民遺跡出土石器の製作技術と型式—中央溪谷帯およびシャン高原西辺部を中心に—」

本論文は、最新の調査資料や研究にもとづいて、ミャンマーの中央溪谷帯およびシャン高原西辺部の石器製作技術と型式から両社会の性格を対比的に論じ、その再検討を行うことを目的としている。1930年代以降、石器にもとづくミャンマーの狩猟採集社会の研究は続けられてきたが、これまでの研究はミャンマー全体の社会を空間的には均質なものとして描き、文化の時間的変化に関心を集中させる傾向があった。本論文では、中央溪谷帯とシャン高原西辺部を、環境的差異に着目しながら比較し、ミャンマーの先史時代狩猟採集社会像の再構成を試みるという特徴がある。

ミャンマーの中央部を北から南に流れるエーヤワディー川(イラワジ川)の両岸には、中央溪谷帯と呼ばれる標高 50m 前後の低地帯が広がっている。一方、東には標高 1000m を越えるシャン高原が連なり、その西辺部の標高 130m から 1000m を越える範囲に、石灰岩の岩陰や洞穴を利用した遺跡が点在している。中央溪谷帯の遺跡は古くからの表面採集資料が中心であり、発掘調査による

資料が少なく、また動植物資料なども欠落している。他方、シャン高原西辺部では、1969年以降に岩陰などの発掘調査が実施されてきており、層位的認識や、理化学的年代測定法による年代資料も蓄積されつつあり、また動物骨などの資料を伴うことも、生業的・環境的理解を深める手がかりとなるものである。そこで、中央溪谷帯においては、1943年および2008-9年に採集された200点弱の石器を中心に、そのサイズをもとに統計的処理を行うこととし、シャン高原西辺部においては、発掘調査による出土資料にもとづいて、層位的状況を踏まえ石器製作技術と型式の変容を解明するとともに、動物骨などの検討から環境的復元を試みている。

本論文は、全10章で構成されている。第1章のイントロダクションに続いて、第2章から第5章までは研究の前提となる情報を整理している。第2章はこれまでの研究プロジェクトをまとめた研究史であり、内戦の影響で考古学的な調査研究が十分な発達を見せなかった状況や、先史時代研究にあまり大きな関心が寄せられてこなかったことなどを指摘している。第3章では、中央溪谷帯とシャン高原西辺部の両地域について、遺跡の分布や、地形的・地質的環境について整理している。第4章では、主としてシャン高原西辺部の遺跡から出土した動物骨などの資料を整理し、大型獣や水産資源の存在から、狩猟採集民の生業や環境について論じている。第5章では、デジタル標高データを使用した地形的解析や、ミャンマー地球科学会が作成した最新の地質学的データを使用した遺跡立地の検討などを行い、遺跡の標高や傾斜面の向きなどについても論じている。

後半の第6章から第10章までは、それぞれの文化における石器の技術論や型式学的な理解を進めるための石器の分析が中心となる。第6章では、分析の前提となる、地域における石器群の検証に用いられる理論を、とくにタイにおける例を中心に簡潔に紹介し、本論文で用いられる石器の分類法や統計的処理の方法などにも触れる。第7章は中央溪谷帯における石器の分析である。従来の研究では、エーヤワディー川がもたらした5段の河岸段丘と石器の形態的な検討から、更新世中期から完新世前期の間に盛行したアニャティア文化を前期（3段階）と後期（2段階）に分ける考え方が定説的であったが、統計的処理にもとづく検討では、前期と後期の二つの「文化システム」に区分する以上の細分は困難であり、従来の学説の再検討が必要であることが指摘された。第8章はシャン高原西辺部の石器群の分析であり、発掘調査によって明らかにされた代表的な3つの遺跡である、バダリン洞穴1、バダリン洞穴2、およびグミャンを取り上げる。それぞれの遺跡の発掘調査の内容や、編年的連続性、および石器や動物骨などを整理し、それらの間に認められる共通性を検討した。第9章では、こうした分析にもとづき、中央溪谷帯とシャン高原西辺部との石器の比較検討を行い、それぞれの地域の特性の比較を論じながら、両地域における構造を明らかにした。最後に、第10章では、以上の検討を踏まえ、ミャンマーにおける先史時代社会の技術的・形態的側面から見た通時的変化やそれぞれの文化の特性を、結論的に論じている。

ミャンマーは、石器文化がインドなどから中国や、タイなどの南方へと伝わる経路の分岐点にあたり、その実態の解明は人類の拡散の実態を明らかにするためにも重要な意味をもっている。本論文では、近年の遺伝子研究の成果も踏まえながら、ミャンマーの果たした位置づけについても理解を深めようと試みている。

学位論文審査結果の要旨

ミャンマーの石器時代研究は、1930年代にミャンマーを訪れた外国人の手によって一定の展開を見せたが、その後、30年ほどにわたって研究が停滞した。1969年になってミャンマー人研究者によるシャン高原西辺部において発掘調査が実施されるが、政治的状況による制約や、関心が歴史時代の仏教建造物などに集中したこともあり、石器時代研究は十分な展開を見せず、近年の調査や研究もミャンマー語による文献が少なくないことから、国際的に適切な評価を得ることが困難な状況にあった。本論文は、そのような中で、近年の資料の状況や研究動向を英語によって紹介したところに、まずひとつの意義を認めることができるであろう。

学史的には、ミャンマーの石器時代研究は1930年代にモヴィウスによって提示された学説の影響を色濃く残しているようであり、1969年以降も、その枠組みは大きく変わることがなかったようである。それに対して申請者は、新たに明らかになってきたシャン高原西辺部の遺跡が、中央渓谷帯とは異なった石器製作技術や石器形態をもち、異なった環境の元での独自性のある文化として位置づけられると考え、新たな視点で周辺地域との関係を考察しようと試みている。ミャンマーの石器文化を一元的に捉えるのではなく、複数の文化とその関係として捉えようとしたことに、本論文の独自の視点を認めることができる。

石器研究の手法においては、伝統的な記述的手法とは異なり、石器のサイズや組み合わせに統計的手法を駆使したことも重要な意味をもっている。ミャンマーにおいて確認されているこの時代の石器の総数は、依然として著しく少なく、とりわけ中央渓谷帯においては層位的情報が一切欠落しているという大きな制約が存在している。さらに、基本となる資料が海外に保管されており実見が困難であることや、新しく出土したシャン高原西辺部の遺跡の資料が十分な公表に至っておらず、実見が困難であるという制約も大きいようである。そうした状況の中で、統計的手法によって一定の研究の方向を導き出した点は、評価される点である。

デジタル標高データを使用した地形的解析は、本論文のひとつの成果と言えるであろう。これまでミャンマーにおいて石器時代研究にこうした手法を用いた例はないとのことであり、新しい方向を指し示す重要な足がかりとなるものと思われる。技術的には特に高度な解析方法を用いているわけではないが、確実な分析を積み重ねていこうとする姿勢は、今後のミャンマーにおける研究の展開を考え、むしろ好ましいものと評価できる。

審査においては、アニャティア文化に対するシャン高原西辺部の文化名は設定できないのかという問題や、両地域の石器製作技術・石器形態の特徴を「文化」として捉えることなどについて質問があり、統計的分析に用いられた石器の基本データを提示することが望ましいという指摘もあったが、資料の制約が大きい中で示された視点や研究の手法は、今後のミャンマーにおける石器研究の展開において、重要な役割を果たすと思われることが確認され、高度な専門性や独創性、および今後の展開が十分に期待できる点など、博士論文として十分な内容を有していると判断された。